

授業を終えて (6月27日公開講座「小学校期を考える・学ぶ力を育てる：金森俊朗の授業論と模擬授業」)

【追記1】「鈴」の“私”の語り部分の重み

・・・庄一の記事の部分からでも、物語として独立・完結します。その場合は、登場人物の関係性の深さが際立ってきます。しかし、“私”の語り部分をきちんと読むと、町にある光景の一つひとつの“もの”に、ある奥行き＝人間が織りなしたドラマが想像され、そう想像することが“私”は楽しい。だから散歩が楽しく「さんぽをよくする」。あなたも街を歩いてご覧下さい。流れる川、人が行き交う道、家並み、台地に続く古い坂道、登り口・下り口にひっそりたつ地蔵、その前で手を合わせるおばあさん・・・を見、味わうことができるでしょう。亀坂にある地蔵にまつわるドラマを紹介しましょう。あなたもこんなドラマを探ったり、想像してみてください。“私”は、東山の寿経寺に並ぶ七体の地蔵さんにかかわるドラマを『安政五年七月十一日』(かつおきんや)という物語に著しましたよ。作者はそう語っているように思えます。そうした想いは“私”の語りの部分を丁寧に読めば分かります。

【追記2】表現することは生きること・・・庄一・アンネにとっての日記を綴ること



お母さんから日記帳をもらった庄一は書き始めの日3月14日に「母がこの帳面をつくってくれた。ありがたい。毎日書こう。寝たままであるためか、もう筆が重い」と寝たままの姿勢にもかかわらず、喜びを綴っています。話し相手もいなく、ラジオテレビが視聴できない。母が来たとき以外の唯一の話し相手がこの日記帳です。毎日ほんの一言書いただけの、苦しい毎日が続く中、4月24日に筆を落として絶命します。40日間命をかけて書き綴った量感・重みを感じて欲しくて現役時代、深夜に書き続けました。今回、初めて全てを掲示し、庄一が書き上げた全てを観ることができるようにしました。圧巻でした。庄一が確かに生きた“あかし＝証”です。表現することは、生きることが一目瞭然になりませんか？

.....
東海林 渉さん(東北大学医学部臨床心理士、前北陸学院大学教員・心理学講義担当)からの感想文

金森先生へ、先日は楽しくて、相変わらず刺激的な、わくわくする授業をありがとうございました。帰り道に、「やっぱり金森先生はすごい。物語ではない3年生の里山の教材をあんな風に物語的にできるなんて…」と妻は言っていました。彼女は教師の視点で模擬授業を受けていたようですが、私は完全に教室の中の子どもの視点で授業を受けていました。立場の違いですね。感謝の意を込めて、授業を受けた生徒の視点から、感想を書かせていただきます。

◆ 想像力とつながり

授業全体を通して、金森先生が板書に書いていた実践課題を考えてみました。吉野弘氏の『生命は』、『里山は未来の風景』、そして『鈴』、この流れで金森先生はいったい何を伝えたかったのか。以前、金森先生は「本当に伝えたいことは言葉にしない」ということを仰っていた気がします。それを踏まえて、今回の模擬授業の実践課題1「他者とのつながり」を、2「想像力を豊かに」して考えてみたいと思います。

つながりに関する考察—『生命は』から

『生命は』の最後の2連「私もあるとき 誰かのための虻だったろう／あなたもあるとき 私のための風だったかもしれない」は、授業を貫く「つながり」というテーマをとらえたものとのことでした。

知らず知らずのうちに、何かと何かをつなぐ存在になることができているという喜び、他者が自分の助けになってくれたことに気付いたときの感謝と敬愛の気持ち。そうした「つながり」を自覚できていく過程に込められている温かい内的な充実感を、文章を読めば読むほど感じました。

そして一方で、その文章が「だったろう」「だったかもしれない」と過去形で書かれているところに、少し淋しさも感じました。現在形で書かれていたなら（「誰かのための虻だろう」「私のための風かもしれない」）、淋しさよりも希望を感じたかもしれません。虻が飛び立ったあとに、風が吹き去ったときに、はじめてそれが「つながり」をもたらしてくれたものであったと知る自分の思慮の浅さ、愚かさを悔いる気持ち。そのようにして、人間は失われたもののありがたみや恩恵を痛切に知るのだというメッセージにも思えます。金森先生が「虻という字は、虫が死（亡）ぬと書く」と言っていたのが印象的で、あえて吉野さんは無数にいる昆虫の中から虻を選んだのかな、とも空想しました。

【金森：私も「過去形」に少し違和感をもちました。でも、そうした場合が多いだろうということと過去から学んだことがかなり今からの生きる力につながること、さらに今ある「虻」「風」をかつてより自覚できるはず、という点では必ずしも「悔いる」に留まらないのではないだろうと思います。

「鈴」を例にすると、庄一は、おあきがまさか自分が慰みや母を呼ぶために鳴らしている鈴の音を励みに歩くことに挑戦し支えになっていたことを知らずに亡くなりました。しかし、おあきのその立ち上がりの行動が、自分の最期の生きる力を生み支えてくれたことは十分に自覚していた（その時点では現在進行形）はずだよね。さらに、おあきは庄一が亡くなった後で、鈴の音を響かせていた人が庄一だったと気づき、庄一を心に住まわせ、これから歩くことに再挑戦していく。過去形だが即現在形、あるいは次第に現在形～未来形という内実をもっているのでは、と考えています。】

つながりに関する考察—『里山は未来の風景』から

その後で取り上げられた「雑木林」は、自然（獣）と人間をつなぐ緩衝帯としての存在を示したものであることから、自然と人間の暮らしを連続体として共存させるための空間であると解釈しました（授業でもそうおっしゃっていたと記憶しています）。「雑木林」の意味の誤解から始まってタイトルの推測に至る流れは、とても刺激的で、ハッとさせられる瞬間（今までの考えが転回する感覚）がたくさんありました。現職の先生方には、教材研究論として、とても参考になる箇所が多かったのではないかな、と後で想像しました。しかし、教師の視点をあまり意識していなかった自分としては、転回の連続に目（頭？）が回ってしまい、まだ内容を整理しきれずにいます…（書きながら考えています）。

おそらく、緩衝帯という存在は「虻」や「風」と同じく、「つながり」を作るものだと思います。金森先生が、緩衝帯が失われると獣が山から下りてきて、いきなり人里に出くわすことになると言っていたように、両者を“丁度いい”距離で住ませるのに必要な空間なのでしょう（“人間”も、人と人の間が近すぎれば衝突しますね。やはり人間として生きるには、人との適度な間が必要です。時間と空間、そして相手の気持ちを想像する余裕が）。

おそらく金森先生は、熊などの獣が人の気配を、人が熊の気配（時に姿そのもの）を感じ取るための緩衝空間として雑木林を説明していましたが、それは実践課題の1にあった「見えないつながりを自覚化、可視化する」というものの代表としても紹介していたのではないかと思います。獣にとって、整備された林は、その先にある人間の暮らし（見えないもの）を自覚させるものであるし、反対に人間にとっても、雑木林から見える獣の足跡や影は、たとえ獣の姿そのものが見えていなくとも、生命の息づかいを感じさせてくれると思います。まさに、生活の土地を共有する者として、見えないつながりを自覚化、可視化するのが雑木林、ということになるでしょうか。それは、足跡や爪痕から獣の生活を想像する力につながっていたらと思います。

矢口高雄の『野性伝説』に登場する鷹匠は、たとえフィクションであれ、そうした想像に長けた人だっただろうと思います。

【金森：「緩衝帯/空間」のとらえは、人と人との距離感としてもとらえることができるという。さすが臨床心理士、深い！ と思いました。人はもともと共同体をつくったとき、自分たちの生きる糧を得るために、かなり広い[自然・生物界と人]、[人と人]の「緩衝帯/空間」、距離をとりながら、共存してきたと思います。あるいは、結果的にここまでは人間が暮らしを営む領域だとする、自然界に生きる獣たちに対する“縄張り”とでも言えるでしょう。中東、アフ

リカの国境線はほとんどが直線です。植民地支配国が引いた国境線は、「緩衝帯/空間」、距離、あるいは暮らしの縄張りを全く無視したために紛争を引き起こす火種をつくったとも考えられます。】

つながりに関する考察—『鈴』から

「鈴」は、授業課題「他者との豊かなつながりを！」を端的に表すモチーフであったと思います。「鈴」の一つから、庄一とおあき、庄一と母親、母親とおあきのつながり、そして母親の心の中にある“わが子”（庄一がおあきに重なる）、おあきの心の中にある“母親”（いないはずの母親）という、断ち切られたと思っていたものがつながっていたという連続性、それに気づくことができた喜びに連想を広げられます。

読み終えた後、石引を歩いてみたいと感じました。それはきっと、読者と物語とのつながりでしょうから、たとえそれが創作された話であれ、庄一とおあきの息吹を感じながら町を歩けるという豊かな体験にも広がるだろうと思います。それまで気にもとめていなかった風景が、まったく新しい世界として体験され、新しい物語を連想させることになるかもしれないと、わくわくしました。これこそまさに、豊かな想像力を刺激するものではないかと思います。

ここから少し、話は金森先生の実践全体に広がります。「デジャビュ（既視感）」（経験したことの無いことが、既に経験した体験であるように感じられること）という言葉は一般的ですが、アメリカのコメディアンが作った駄洒落で、「ビュジャデ (Vuja De)」という言葉もあるそうです。「ビュジャデ」は「未視感」と訳され、見慣れたものをまるではじめて見るかのように見ることで、人類学者のトム・ケリーが「人類学者は『ビュジャデ』を通じてひらめきを求める」と言っています。石引という土地、亀坂という地名が身近にある中で、その風景をガラリと変えてくれるこの授業は、まさに「ビュジャデを通じた感動」だと思いました。

前に金森先生に教えてもらった「ひこばえ」（秋田では二番穂）の話も、私の幼少期に気にも留めずにそこにあった風景を一新させてくれるビュジャデでしたから、金森先生の授業や話には、今回の授業の課題にされていた「見えていない（見ようとすれば見える）ものを自覚化、可視化する」ということが通底していると思いました。授業を通して、それまで見ていた何気ない風景が新鮮さを取り戻す、日常生活の中にもともとあった光輝くものを見つけられるようになる、といった発見。そこがきっと、金森先生の授業論の魅力なのではないかと感じました。

【金森：「ビュジャデを通じた感動」...それを大げさに日常のなかの「未知との遭遇」なんて言い方もしていました。谷川俊太郎絵本『あな』はその典型的傑作だと思います。押し入れの隙間や指をぬらして開けた障子の穴から見た見慣れた部屋や戸外の光景、多くが感動する逆さ富士や天橋立の股覗きの光景などもそれに近いですね。学びを獲得できたということは、世界と自分の捉え直しができたこと、今回教えていただいた「ビュジャデ」（未視感）... だということでしょう。

つながりに関する考察—『夕焼け』『鈴』から

『生命は』のとなりに載せてあった『夕焼け』の詩。仙台に帰ってから読みました。やさしい心の娘の押しつぶされそうな気持ちが痛々しく感じられました。それと同時に、その娘のつらさを想像した「僕」がいたこと、想像した「僕」にとって彼女は虻あるいは風になったかもしれないことを考えると、むなしさや悲痛の詩というより、希望の詩にも読めました。

おそらく『鈴』が持っているものも、それに近いのではないかと思います。ある人がしていることは、見えないうちで別の誰かとつながっていて、本人が知らないところでその誰かを救っているという隠れた物語。人を絶望から救うのは、目に見えてすぐに見つけられるつながりではなく、時間をかけて作られる見えにくく隠れたつながりで、それに気づいた瞬間に起こる感謝と喜びではないか。そんなことを考えました。自分の知らないところで誰かが思ってくれている、見えないところで信じてくれている、見守ってくれていると実感できることは、それが実感できた人にとって、心強いものであろうと思います。

【金森： 詩「夕焼け」は授業では全く触れませんでした。参加者が後で自由に考えてくれたら、と思い、掲載しました。さすが東海林さん、あの詩を「希望の詩にも読めました」はスゴイ。あの少女の「身体をこわばらせて」「固くなってうつむいて」耐える姿を、「いつも」見つめる筆者。『娘さんよ「美しい夕焼け」を見てごらん、沈みゆくのを惜しみながらも煌々と輝いているだろう、あなたもそうしていいんだよ。そんなに自分を責めないで』とでも語りかけたっかたのだろう。温かいまなざしを注いでいる人がいる。それも一種の希望い違いない。】

つながりに関するまとめ

『生命は』の最後の2連は、人が助け／助けられる関係を詠っています。私が誰かの虻であったことの喜びと、あなたが私の風になってくれたことに対する嬉しさ、その両方を伝えているような気がします。つまりは、誰かが支えてくれる一方で、やはり誰かを支える存在になることが、人生に希望を持つことであるように思います。

助け／助けられる相互性、獣が人間の暮らしを感じ／人間が獣の暮らしを感じあえる相互性、庄一がおあきを助け／おあきが庄一を助ける相互性。花と花という個体を隔てる完全な孤独を、虻や風といった関係のない他のものがつなげる。人間と獣という本来混じり合わない生き物を、雑木林という“ゆるやかな緩衝帯”がつなげる。庄一の母親にとって断絶したはずの子どもへの希望を、鈴を介しておあきがつないでいってくれる。おあきの中で閉ざされていた実母との交わりを、庄一と鈴がつないでくれる。今回の授業を通して、私は「人は独りだけでも孤独ではない」というメッセージを感じました。

ここまできて、おそらくそれは、金森先生の授業実践が持っている雰囲気を支えられているのだらうと思えました。誰かに受け入れられる体験と、誰かを受け入れる体験、その両方が授業の中に組み込まれているからこそ、そうした相互性の喜びがありありと実感できるのではないかと。

自分が担当しているカウンセリングでも、相談に来てくれた人が、受け入れられていると思うと同時に、何かをこの人に伝えたいと思うようになってくれるように接したいと思っています。そのことを考えるのにも、今回の授業は勉強になりました。

ただ一点、この授業を「つながり」というキーワードで整理しようとしたときに、どうしても『里山は未来の風景』の教材だけが自分の中で位置づけに困ってしまいます。『生命は』『夕焼け』『鈴』は、人と人とのつながりを表したものとして整理できている（気がする）のですが、『里山は未来の風景』は人間と自然（獣）のつながりという点で、異種のような気もしています。それこそ、自分の中では無理に「つながり」をつけるために「人間にも緩衝帯になるような間が必要」などと書いたのですが、取って付けた感じがあります。

金森先生がこの授業の中に、『里山〜』を持ってきた意図は、どのようなところにあったか聞きたいと思えました。おそらく現場で使用されている教材を取り上げる意図や、「雑木林」に関する誤解を軸に据えた授業の展開、「緩衝帯＝つなげるもの」という存在への焦点化など、いろいろと考えられますが、いかがでしょうか。

【金森：「里山は・・・」を取り上げた意図の第一は、東海林さんに見抜かれた通り、実践課題に直結させた、積極的教材ではありません。もともとは今回、詩に引き続き、「鈴」だけを取り上げるつもりでした。でも、学生や若い教師を考えたら、教科書教材をも短時間でも入れなければという配慮をしたからです。と同時に、こうした一見して直接つながりが見えない教材もかなり深い教材研究をすると関係が見えてくるんだ、だからもっともっと学習（科学と体験）を積まなければ！ という脅迫めいた意図もありました。

第二の意図は、3.11、特に福島原発過酷事故以来問われた自然との共生（つながり）への深い認識を育むためです。先日のTBS報道特集で「最も人間を殺してきたのは、蚊だ」と強調する研究者が出演。蚊が媒介するマラリアを典型とする伝染病を問題に。特に沖縄波照間島の99.8パーセントの島民が感染した「戦争マラリア」の問題。日本軍による強制疎開がもたらした悲劇です。里山・棚田に限らず水田は多様な生物のつながりによって、稲が実り、地下水を涵養し、土砂流失を防ぎ、空気を浄化し、・・・という世界を創りあげてきました。そのつながりが蚊の異常発生、マラリアの蔓延も防いできたのです。（アフガニスタンで、内戦終結時、荒廃していた（乾田化）水田に水を張り稲を植え、大喜びし、復興がみえてきたとき、襲ってきたのは、蚊の異常発生とマラリアの蔓延による死亡でした＝1993年ダラエ・ヌール渓谷一帯にマラリア大流行）。水田が創りあげていた多様な生物のつながりが崩壊していたからです。

第三の意図は、その水田の生物多様性、里山の生物多様性は、かつて歴史に生きてきた人々が長年営々と築きあげてきたということです。過去の人々との関係性（死者と生者の関係性）の自覚です。憲法9条をそのように私たちは捉えています。それと同じです。それをあの授業では、“雑木林”を例に、里山の雑木林は、「人々の手によって長年育まれてきた」人工林だと力説しました。山に接する棚田には、土への栄養補給という点でも、人間の暮らしに必要な食料とエネルギー供給という点でも人の手による雑木林が必要であった。雑木林は棚田地帯その世界に欠けていた「虻」「風」であったのです。

まとめれば、第二が《生物間の横のつながり》に対し、第三は《人間相互の縦のつながり》です。

そうした意図ですから東海林さんの言うとおりの「異種」だと思い、「鈴」の時間と区分けしました。】

さて、そろそろ終わりにしたいのですが、正直、なかなかまとめきれないでいます。私にとっては、これだけ

書いてもまだまだ整理がつかないくらい豊かな授業だったようです。この続きは、この後に続く生活、仕事を通して考え続けていこうと思います。ありがとうございました！！

【金森：参考資料・・・関係性[いのち・存在のつながり]についてこれまで以下のように述べてきました。

私が考える「四つのいのち・存在のリレー」

「いのち・存在のリレー」には、次の四種があると考えています。

- ①親から子へと代々受け継がれる狭い意味でのいのちのリレー。
 - ②全て生物が食物連鎖によって生存し、人間はその頂点に位置してどん欲に食べ、生かされているという意味でのいのちのリレー。
 - ③成長し働き暮らす人生は、友人・地域の人・同僚などの無数の他者に支えられ、他者を支えて成り立っているという意味でのいのちのリレー。
 - ④に「人類の多年にわたる自由獲得の努力の成果」を「信託」（憲法九七条）され、発展させなければならないというリレー。
- ②③は横（空間、現在の世界）のリレーであり、①④は縦（時間＝歴史、過去・未来のリレーになります。）】

参加者の感想（アンケートに書かれた感想）

★児童文学の読みとりは、やっぱり深くて難しいなと思ったけど、とても面白かったです。「鈴」という作品は、自分にも支えてくれる人（鈴を鳴らしてくれる人）がいる、人は見えなくても支え合うことができると、温かい気持ちになって、とても好きでしたし、良い刺激を受けました。また、教師の教材研究の大切さを改めて感じる事が出来ました。ステキな講演ありがとうございました。

★今日は、教材を読み解くことの重要性を学びました。子どもが想像力をもって文学を読むにはまず、教師がしっかりと教材研究をする必要があるとわかりました。私自身、「鈴」を読んでいて、早く次が読みたいと思いました。そのような作品の出会いを私も子ども自身に伝えていける存在になりたいです。そして、見えるつながり、見えないつながりを大切にしていきたいです。ありがとうございました。

★さまざまなコミュニケーションツールを持つ時代の大人や子どもは、つながりもたくさん持っているように感じます。しかし、その中身や密度でいうと、とても希薄なものであるとも言えます。今回の「鈴物語」の模擬授業を受け、つながりとはどういうものかを考える機会となりました。これからの教員生活の中で、子どもたちとつながりがあるものか一緒に考えていきたいと思えます。

★学級目標は、よく「みんな仲良く」「協力しましょう」などが定番だが、金森先生がこの作品を教材として選んだことでもっと内容のつまった深いものになった。知った顔だけがつながりじゃない関係性の深さが今回わかった。金森先生はよく地元の教材を選んでいる。当事者性によって子どもの心にせまる学びが出来ると思った。もっといろんな作品を知りたいと思った。今回の「鈴」のように続きが気になって仕方がない文学の読み方も勉強したい。

★金森実践には、一つの教材を授業にするにあたって、教科書通りに進めるのではなく、自らが実際に見て、感じて、実物を用意し、オリジナルの授業を作っているのだから教材研究をしっかりしているのだと改めて思った。今の教師に求められていることが多くあり、自分は教師になったら金森先生のような授業はできなくても、教材はしっかり準備し、子ども達に伝えていきたい。先生の習字でかかれた字を実践にみる事ができてとても嬉しかったし、私もこのようなやり方をして見たいと思った。

★元教員、定年退職して4年になりますが、今日の講義を受けてメラメラと授業に対する意欲がわいてきました。実現できないのが残念です。ボランティアで読み聞かせでもできたらなと思います。ありがとうございました。また参加したいと思えます。

★見えているつながり、見えていないつながりを自覚化、可視化できる子どもたちに育てていくために、まずもって教師である私自身がその努力を絶えずしていきたい。

★現場にいと教材と向き合う時間が少なく、向き合うところが気を向ける時間も少ないです。という自分のなまけ気持ちを打ち消すためにも、毎年この講座に参加させてもらっています。明日から頑張ります。（長野の教師）

★3年次のゼミレポートで「鈴」をしましたが、様々な視点をもつところがあーなるほど！と思いました。庄一とおあきについてはレポートで書きましたが、庄一のお母さんの心を読んでいなかった。と気づきました。多面的、複眼的に物事をみなければと思いました。

★すべての内容がよかった！私もだれかのための虻になろうと思います。今、58才ですが、いつでも学ぶことは出来

ると思いました。心がリフレッシュされました。ありがとうございました。

★じっくりズバリ今の子どもを見て必要とされている課題に応えた報告だった。それも具体的な機材を通して学びを深めて報告だった。それも具体的な教材を通して学びを深めた内容だった。明日の元気をもらった時間でした。ありがとうございました。

★去年は都合がつかず来れませんでした。その分、今日、2年ぶりの講演会、授業のように面白かったです。小3の教材は今回初めて知りました。今6年担任ですが、6年生にも紹介したい内容でした。私もとても学ばせていただきました。ありがとうございました。

★先生の朗読によって、ストーリーの展開、イメージの膨らみが自分の中で変化していくのがわかり、とても面白かった。準備の大切さ、教材研究をもって取り組んでいこうと思いました。先生、お疲れ様です。貴重なお時間をありがとうございました。

★かつおきんやさんの「鈴」の授業を受けてみて、自分自身について「どんな見えてないつながりがあるのか」を今一度考えてみようと思いました。

★15:30で帰る予定だったのですが、最後までねばって聞くことが出来ました！見えている関係性だけではなく、見えていない関係にも目を向けていくと、いつもとは違う観点を育むことが出来るのだと思った。ありがとうございました。

★今日はありがとうございました。教材づくりの参考になりました。★教職を目指しているので大変参考になりました。★とても参考になりました。かつおきんやさんの本を読みたいと思いました。

★今回も名言のお土産も（資料のお土産も）たくさんいただきました。ありがとうございました。

★圧倒的でした。授業の内容もでしたが、金森先生の人柄に惚れました。

★言葉の大切さや、他者との関係性を豊かにする物語について、自分なりに深めていきながらももっともっと子どもたちに伝えていきたいと思いました。ありがとうございました。学生時代に先生に勧められて「鈴」を読みました。読むのは2度目だったので私にとっては気づきと発見が本当にたくさんあり、読み応えがありました。本当に面白かったです。感謝！来てよかったです！

★やっぱり金森先生はすごいなと改めて思いました。一つの事からどんどん話が広がるその知識の深さ、広さを見習って、自分も勉強を進めていこうと思いました。

★1限での「雑木林」のことは私も勘違いしていた。先生が見せてくれた雑木林の写真の本を見て、とてもきれいだなと思った。自然のままが良いと思われるものもあるが、人の手が加えられた雑木林など、人の手が加えられたものにもいいものがあると知った。かつおきんや先生の「鈴」がとても面白く、庄一とおあきはお互いにつながっていることが知らないが、本当は知らないところでつながっており、すごいと思った。金森先生の読ませ方も、物語にひきこむような感じがして早く読みたいという気持ちがどんどん大きくなっていった。

★今回の話はどんどんストーリーをつなげて考えなければいけなくて、私は文章を理解するために少し時間がかかるので、なかなか話がつなげることができなかった。★凄く良かったです。感じる事がたくさんありました。

★初めて触れた作品でした。分かりやすい講義、ありがとうございました。

★前回「つり橋わたれ」と「海をかつとばせ」を比べて学校での学びを子どもの生活とつなげること、そのために深く読み事を教えて頂きました。今回は自覚化、可視化することを（そのためには良い教材）教えて頂きました。また、新しい課題解決に向けて頑張ります。次も参加します。また学ばせてください。

★先生の授業を受けて、とても心に迫る授業だと思いました。「鈴」を読んでいくなかでも表現にこめられた思いなどを本当に「どういう気持ちだったのだろう」と考えました。先生が児童に本当にどんなことを学ばせたいのかということを考えて、様々な工夫、研究、話し方、準備をしているということが分かりました。私もこれからたくさん学んで将来のために生かしたいと思いました。

★今の子どもたちの世界で関係性に気付いていくこと・・・って具体的にどんな事なのかな？ともすれば、頑張りあう方向に大人は捉えがちですが。

★誠に素晴らしい授業をありがとうございました。つながりを感じさせられた。

★考える場面がたくさんあって、脳がよく動いていました。金森先生の授業を小学生のときに受けてみたかったです。「鈴」すごく感動して涙が出そうになりました。まだ自分の頭が整理されていません。

★ありがとうございました。「生命は」の詩から最後まで、共生についてじっくり考えるすてきな時間となりました。想像力をはたらかせることは楽しいことですが、それをじっくり楽しむ機会が減っているのかな、と感じています。パソコンがスマホに囲まれながらももっとも人間らしい部分を大切にしていきたいものだなと思いました。口下手なのですが、のちほどお酒のみながら、ぜひもっといろいろ教えて頂きたいです。

★とても面白かったです。ありがとうございました。

金森先生へ

先日はありがとうございました。あれから2週間が経ちますが、先生の授業の余韻にひたっております。

何度も『生命は』や『鈴』を読み返し、思いをめぐらせました。東海林が感想を送ったと知り、ぜひ私も!!と思い、私なりに感じたことを書かせていただきます。

『生命は』『みるく世がやゆら』『鈴』、どの作品も、はじめて出会ったときはその物語の美しさ、言葉の美しさに感動し、心が浄化されたような気持ちになりました。もちろん、切なさや痛みも伴いますが。

しかし、帰ってひとりで読んでみると、美しいだけではない違和感を感じました。それが何かさぐりたくて、金森先生の言葉を思い出しながら何度も読みました。

まず気づいたことは、どの作品も『生』の隣に『死』があることです。『生命は』の詩は、冒頭に『完結』という言葉が出てきます。生きることについて考えることは、死について考えることでもある。金森先生のこれまでの著書に出てくる授業ともつながる気がしました。人は死を前にして一層生を意識し、心が動かされます。

そうすると、『生命は』の詩はただ単に「自分の行いや他人の行いがどこかでつながって蛇や風になりうる」というものではないような気がしました。そこには必ず生へのひたむきさや一生懸命さ、そういった

ものが必要なのではないかと思いました。それは他の2作品についても同じです。

そしてもうひとつ。私が一番ひかかったのは、なぜ『鈴』のおあきを「右足がひどくねじれ、左ひざはまがらない」という姿に設定したのか、ということです。足を切断した、とかいう方が想像しやすいのに、どうしてそこまでひどい設定にする必要があったのか。この文を読んで、自分の中にじわじわとわく感情はなんなのか。

私なりに考えた答えは、『生命は』の詩の中にありました。

無関心でいられる間柄

ときに

うとましく思うことさえも許されている間柄

この部分を何度も読んだときにははっとしました。

そうか、私の中にうとましい(いやな感じがしてさげたい、とおざけたい)感覚があるのだと。

『みるく世がやゆら』の一節、「気が重い、一層戦争のことは風に流してしまいたい」にもあるように。

『夕焼け』の娘が美しい夕焼けも見ないでうつむいていたように。例えば重い病気の友人の見舞に行くのに気がひけたり、東日本大震災の話をしなくなったり。

「大切なこと」は、ときに美しく、ときにうとましいものであるということ。うとましいと思うことさえも、許されているということ。そして、『夕焼け』を読み、「うとましい」という感情の根っこのには、「やさしさ」があることもある

のではないかと思いました。他人の痛みを自分の痛みを感じるから。まさに
沖縄の高校生のように。 だからおあきの足はねじれ、蝶ではなく蛇なのかもしれない

最後に。先生は講議の時に稲の花は午前中の2~3時間しか
咲かないという話を聞かせて下さいました。稲は そのとき・その瞬間に
虫や風の訪れを待っています。

人にも必ず その2~3時間は いろんな形でおとずれ、そのときに
より強くつながりをもとめるのだと思います。

でも、人間と稲には 大きな違いがあります。それは、「人はその関係が
リアルタイムでなくても つながることができる」ということです。例えば
おあきと庄一のように、その瞬間に直接 出会うことがなくても、さらには
過去のことで、人は つながることができる。なぜなら、「人は 想像
力をもって 自分の中に他者を住まわせることができるから (金森先生の講議
より)」です。つらいとき、悲しいとき、何かにたちむかうとき、喜びをわか
ち合いたいときなど、人は 時間も 空間もこえて つながりをもつことが
できるのだと思いました。そう考えると、私たちは なんてすてきな特殊
能力を備えられているのだろうと思いました。

たくさん つながるには、とおげないで むき合うこと、想像力を はた
らかせることが大切なのだと 感じました。

金森先生の授業から 思いをめぐらせるうちに、もしかすると 本質から
ずれてしまったかもしれません。申し訳ありません。でも、こうやって いろいろ考

えること、いろんな人と そのことについて 意見をかわすことは とても楽しか
たです。ありがとうございました。ぜひまた このような 機会にめぐりあえ
たいと思います。9月にお会いできるのを 楽しみにしております。つたない
長文を読んでくださり、ありがとうございました。

H27. 7. 13

東海林 幸子

幸子さん、感想お手紙、ありがとうございます。丁寧に書かれた美しい文
字に驚き、とても有り難く思っています。飲み、食べながらの金沢時代で
のお話しの際にも思っていたのですが、お手紙を読むと改めて感性が鋭く
豊かな人なんだなあと思いました。

「どの作品にも『生』の隣に『死』があること」、「自分の行いや他人の行
いが」「生へのひたむきさや一生懸命であれば」「どこかでつながって蛇や
風になりうる」という捉え、否定的に捉えてしまう「うとましい」感情も、
他者への優しさ、のめり込みが強い中で生まれることを考えれば「許され
る間柄」とも言えるという捉え、「人は時間も空間もこえてつながりをもつ
ことができる」「たくさんつながるには遠ざけないで向き合うこと、想像力
働かせることが大切」という捉えに、とても納得共感しています。

東海林夫妻、そしてたくさん参加者が、とても学びを深くされている
ことに授業者の私がつとても驚き、感謝しています。この日の学びから、
何か放射するものに乗りがかりながら取り組んだ、関心をもったことがあ
りましたら、ぜひお知らせ下さい。皆さん、ありがとうございました。

金森 俊朗